



令和6年度
広島県障害者文化芸術
活動支援事業報告書



目次 Contents

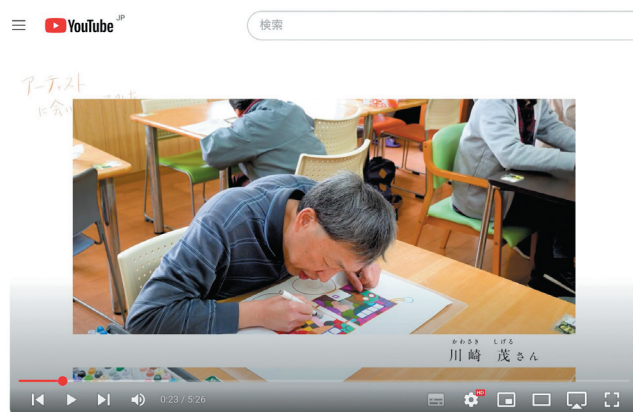
令和6年度 広島県障害者文化芸術活動支援事業について	1
(1) 広島県アートサポートセンターの運営について	2
(2) 普及啓発・情報発信事業の実施	3～5
(3) 人材育成事業の実施 表現が始まる はじめの一步 アートセミナー&おしゃべり会	6～10
(4) 創作活動支援事業の実施 ア. 学びと体験ワークショップ イ. 障害福祉サービス事業所等への専門家派遣	11～17
(5) その他障害者文化活動の振興に資する事業 ア. 文化芸術等への鑑賞に関する事業 イ. 企画提案事業	17～28
(6) その他協力依頼対応	29～30
(7) 相談 相談等への対応	31～32
1/24 に思うこと	33～34
1年を振り返って(総括)	35



令和6年度 広島県障害者文化芸術活動支援事業について

今年度は以下の4つの点を目標にして事業実施に取り組みました。

1. オンラインプラットフォームの活用促進：オンラインプラットフォームを活用し、障がいのある方々が文化芸術活動の情報が得られる環境を整えるとともに、オンラインを通しての発表の場の充実を図り、より多くの人々に彼らの表現の楽しさや可能性を伝えます。
2. 交流・ネットワークの強化：意見交換やネットワーク形成を通じて、参加者同士の信頼関係を深めます。さらに、異なるバックグラウンドを持つ方々との交流を促進し、包括的な支援の枠組みを構築します。
3. 施設・事業所との連携強化：施設や事業所との連携を深め、より包括的な支援体制を構築します。文化芸術活動に携わる専門家との協力を通じて、障がいのある方々がさまざまな表現活動に参加できる環境を整えます。
4. 障がいのある方々への支援拡充：1、2、3の目標を通して、より多くの障がいのある方々に支援を提供することを目指し、自己表現の場を見つけられるようにします。



オンラインプラットフォームの活用促進：YouTube 番組「アーティストに会いにいってみた」



交流・ネットワークの強化：のらのらの会



施設・事業所との連携強化：専門家派遣の様子



障がいのある方々への支援拡充：シンポジウム「参加者の声」から

(1) 広島県アートサポートセンターの運営について

ア．アドバイザーの設置

障がいのある方、サポートしている方の多様な文化芸術の創造、鑑賞等に資するため、普及啓発・情報発信事業、人材育成事業、創作活動支援事業、相談業務等、アドバイザー（相談員）を2名（うち1名は兼務）と必要に応じてアルバイトスタッフを配置し、サポートセンターの運営、相談対応を行いました。

イ．認知度の向上対策等

広島県アートサポートセンターおよび障がいのある方の文化芸術活動の認知度向上を図るため、各種事業の案内や報告などの情報をホームページやソーシャルメディア（Facebook、Instagram）を通じて広く発信しました。

また、以下のような場面で活動事例の報告やセンターの紹介を行いました。

- ・北海道・北東北ブロック広域センター アールブリュット推進センター Gently（ジェントリー）からの依頼による事例報告
- ・広島県知的障害者福祉協会 事業部会 文化・芸術活動の部 圏域委員会での事例共有会への参加
- ・韓日交流会における、日本の障がいのある方の表現活動の取り組みの紹介

情報収集は、セミナーやワークショップ時のおしゃべり会、事業後のアンケート、支援者が集まる場での聞き取りなどを通じて、ニーズ（活動要望等）の把握に努めました。



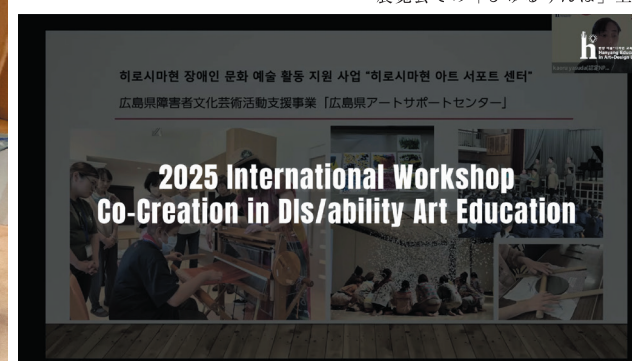
お寺での展示



展覧会での「ひゆるりんば」上映



教会での作品とアートグッズの展示



オンラインでの事例報告

（２）普及啓発・情報発信事業の実施

ア．作成したホームページの管理運営

委託業者と連携しながら、ホームページの管理・運営を行いました。

イ．障害者文化芸術活動に関する情報の収集・発信

広島県内外で開催される関連事業の情報を、チラシ、メール、ソーシャルメディア（Facebook、Instagram）などを通じて収集し、ホームページやSNSにて広く発信しました。

また、教会やお寺、商業施設、韓日交流会などのイベントにおいて、あいサポートアート展やピースアートプログラム アート・ルネッサンスに入選した作品や、広島県内で活動するアーティストの作品展示の協力を行いました。この活動を通して、県民や芸術活動に参加していない方々、韓国の方々にも広く作品を紹介することができました。

さらに、表現活動に関する情報の普及を目的に、YouTube 番組「ひゅるりんぱ」や、「アーティストに会いにいった」の撮影・編集・配信を行いました。

アートに関する権利の普及は、「障がいのある方の権利に関する Q & A ハンドブック」等の資料配布を実施しました。

【年間発信数】ホームページ 147 件、Facebook 148 件、Instagram 27 件 合計 322 件

【アクセス数】ホームページ 41,044 件、Facebook 4,595 件、Instagram 1,417 件 合計 47,056 件

「障がいのある方の権利に関する Q & A ハンドブック」

「障がいのある方の権利に関する Q & A ハンドブック②」ハンドブック申込件数】10 件

● YouTube 番組「ひゅるりんぱ」 配信回数 12 回 総視聴回数 914 回

ひゅるりんぱ



YouTube 番組「ひゅるりんぱ」

●表現を楽しもうプロジェクト～アーティストに会いにいった～

県内で表現活動に取り組む障がいのある方の発掘や、日常の様子・想い・作品の魅力を多くの方に伝えることを目的に、今年度は4名のアーティストの取材を行いました。また、令和5年度に撮影した3名分の動画も公開しました。今年度撮影した4名の動画は、令和7年度に順次公開予定です。

配信回数 3 回 総視聴回数 665 回

< 2024 年度の取材先 >

1. アーティスト名：川崎 茂 さん

【取材・撮影日】2025 年 2 月 28 日（金）

【場所】社会福祉法人ひとは福祉会 ひとは工房（安芸高田市）

【アーティストサポーター】ひとは工房のみなさん

【インタビュアー】保田 香織

【撮影・編集】映像クリエイター 金山 翔

2. アーティスト名：水ノ上 茉優 さん

【取材・撮影日】2025 年 3 月 7 日（金）

【場所】社会福祉法人三矢会 太田川学園（広島市安佐南区）

【アーティストサポーター】太田川学園アートディレクター 羽鳥 智裕さん

【インタビュアー】保田 香織

【撮影・編集】映像クリエイター 金山 翔

3. アーティスト名：中曾 雄斗 さん

【取材・撮影日】2025 年 3 月 10 日（月）

【場所】中曾 雄斗 氏 自宅（広島市西区）

【インタビュアー】保田 香織

【撮影・編集】映像クリエイター 金山 翔

4. アーティスト名：竹田 一雄 さん

【取材・撮影日】2025 年 3 月 24 日（月）

【場所】社会福祉法人三矢会 豊平ケアホーム（山県郡北広島町）

【アーティストサポーター】太田川学園アートディレクター 羽鳥 智裕さん
太田川学園スタッフ きよみさん

【インタビュアー】保田 香織

【撮影・編集】映像クリエイター 金山 翔

配信場所：広島県アートサポートセンター YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/playlist?list=PL6Cq9wscb93L7Eo-jCkyWLvinQp7QJmxz>





「アーティストに会いにいった」撮影風景

〔成果〕

SNS フォロワー数は徐々に増加しており、訪問先やイベントに参加した際には「YouTube を見ました」という声が寄せられるようになってきました。また、動画を通して活動の様子を見た障がいのある方から出演希望の問い合わせが寄せられるなど、発信した情報が確実に広がりを見せ始めています。このことから、障がいのある方が自身で表現活動について情報を得たり、発信したりする機会が徐々に拡大しており、さらに継続することで社会的な認知や理解の向上につながっていると考えています。

〔課題〕

動画の撮影や編集に関する業務負担が大きく、継続的な情報発信体制の整備が今後の大きな課題となっています。また、動画への出演を希望される方への対応体制も十分に整っておらず、個別の調整に多くの時間と労力を要している状況です。さらに、「アーティストに会いにいった」シリーズの出演者選定については、より公平性と多様性を確保する視点から、選定基準や方法の見直しが必要であると考えています。

また、表現活動の裾野を広げていくためには、より多くの人々に関心を持っていただけるような工夫に加え、継続的な広報・宣伝活動が不可欠です。そのため、今後は様々な立場の方々からの意見や協力をいただきながら、多様な視点を取り入れた情報発信に取り組んでいく必要があります。

（３）人材育成事業の実施

表現が始まる はじめの一步セミナー

障がいのある方の表現活動に興味をお持ちの方々を対象に、文化芸術活動に関する知識や支援スキル向上を目指し実施しました。

●アートセミナー & おしゃべり会 1

「ケアする現場のものづくり～企画展＜きょうの雑貨＞開催から見えたこと～」

【実施日】2024 年 10 月 12 日（土）13:00 ～ 16:00

【場所】そらさキッチン（広島市中区）

【内容】2021-22 年に鞆の津ミュージアムで開催された企画展＜きょうの雑貨＞で展示された、多彩な実例および商品の実物を多数紹介いただきながら、表現すること・働くこと・社会のかかわりなど、福祉／ケアとものづくりをめぐるあれこれについて考え、対話しました。

【講師】鞆の津ミュージアム キュレーター／生活支援員 津口 在五 氏

【参加人数】支援者 10 名

参加者からの声 アンケートより

- ・展示の雑貨も、値段のある作品をいろいろとみられて良かったです。
- ・「きょうの雑貨展」はコロナで県外に行けない状況だったため、行くことを諦めた展覧会でした。雑貨もいろいろ拝見できて、充実した一日となりました！



買えば、友

全国各地にある 64 の福祉現場で生まれた雑貨を約 1,000 点集めて展示／販売した企画展＜きょうの雑貨＞を鞆の津ミュージアムで 2021 年に開催したのですが、それは私自身にとっても学びだらけの経験となりました。

全体的にとっても印象的であったのは、（今すでに）利用者さんの中に在るものをできるだけ変えないで、支援者さんたちがそれに「寄せて」いく態度です。つくり手となる利用者さんの好きなことや得意なことなど「強み」を最大限いかす一方で、こだわりやくせといった「弱さ」とされることにも着目し、それを製造過程にとり入れる。前者はわかりやすいかと思いますが、後者の実例としては、常識的な製品基準であればクリアできないような不揃いな工具の痕跡を類例のないデザインとして肯定することなどがあげられるでしょう。それは、「できない」をそのままのかたちで「できる」へと換骨奪胎させる支援者の粘り強いまなざしの現れ。そこでは、既存の「能力」や「生産性」という言葉の意味が転換されているわけです。別の言い方をすれば、健常者中心の社会の中では否定されがちな営みに「居場所」が与えられるプロセスが雑貨制作である、ともいえるのかもしれません。

もうひとつは、多様な職能の「かかわりしろ」として雑貨がある、ということでした。美術的な知識を生かした創作支援、企画立案・手仕事・デザイン・陳列・販売などなど。製品が世に出るにあたっては、生存に直結した食事／排泄にまつわる直接的な身体介助に必要とされる技術とは別の専門性が求められます。しかし、それもまた「福祉」の仕事。様々な支援者が媒介者となることなしには、福祉現場にねむる表現がより具体的な仕方です。社会へとつながることはない。そのことをあらためて実感させられたのです。

世の中的に「無駄」で「価値がない」ものをお金で買える商品という（あらゆる人に）開かれた状態に変え、共感＝購入してくれるかもしれない誰かに向けて差し出していく。ケアの現場における雑貨制作という営みは、潜在的な「友」への呼びかけなのかもしれません。

津口 在五



●アートセミナー & おしゃべり会 2

「アート・ルネッサンスからのインスピレーション～審査委員が見た作品の魅力～」

【実施日】2024年11月30日（土）13:00～15:00

【場所】無印良品 広島アルパーク まちの保健室（西区）

【内容】障がいのある人の公募作品展「ピースアートプログラムアート・ルネッサンス 2024」の入選作品数点を見ながら、審査の裏話や作品エピソードなどを聞きました。また、鑑賞しながら作品の魅力について対話をしました。

【講師】Grande ひろしま編集長 平木 久恵 氏
アートギャラリーミヤウチ学芸員 今井 みはる 氏

【参加人数】支援者7名

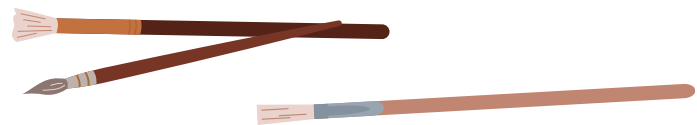
※セミナー&おしゃべり会2は、広島県と広島市が協働で実施しました。



「アート・ルネッサンスからのインスピレーション～審査委員が見た作品の魅力～」の様子

参加者からの声 アンケートより

- ・作品をみながらいろいろな人と話し合うのも楽しいと感じた。いろいろな感想があって楽しかった。
- ・活動方法のレパトリーが増えてとても良かったです。共同作品作りを楽しもうと思います。
- ・私に関わっている利用者さんも全て自立してできるという訳ではなく、職員とのやり取りを楽しんでいるので、これからもそれを大切にしていきたい。



アート・ルネッサンスは、作品も人もインスパイアする！

判定する力量もセンスもないのに、無謀にも「アート・ルネッサンス」の審査委員を引き受けてしまい、自信のないまま審査に参加しています。

ところが、これは正解だったのです。情けないのですが、見栄っ張りのサガとでも言いましょうか。著名人の作品は、付けられた解説をきっちり読み、頭で見てしまう。でも、「アート・ルネッサンス」の作品は、審査という言葉に感じる「上から目線」でも差別的な気持ちでもなく、構えず素の自分で見ることができるのです。

作品を自分の好みで選んでから、おもむろにタイトルを見ます。そして、勝手に作品と対話を始めるのです。「きっとこんな思いがあったんだろうなあ」「こんなところまで描き込んで！」「こんな風に見えるなんて、不思議！」と、驚きや思いがけない発見をして楽しむ。他人の評価を気にしたり、そんなくしたりすることのない、心の赴くままの作品だから、私も素直に楽しむことができるのだろう。

そこに、他の委員たちから対象の捉え方や以前の作品からの広がりなど専門的な意見を聞かせてもらおうと、私が見て過ごしていた作品からも全く新しい世界が開けていきます。この「目からウロコ」の面白さは素人審査委員ならでは！私はそれを人につい、しゃべってしまうのです。これだって、ファンのすそ野を広げるのに役立っているはずと、自負しつつ…。

ある時、制作現場を記録したビデオが会場に流れていました。コミュニケーションのあるなしに関わらず、制作者同士やサポーターたちと場を共有すること自体が刺激になり、新たに魅力的な作品が生まれるのです。その過程を目の当たりにして、これこそが「共に生きる」姿ではないかと心が揺さぶられました。「場」の存在のたいせつさにも改めて気づきました。

一人でできることなんて、たかが知れています。「アート・ルネッサンス」は、私に多様な人の多様な思いに触れることで新たな展開が始まるすばらしさを教えてくれました。そして、一人の審査委員を育ててくれたのです。



『Grande ひろしま』編集長 平木 久恵

アート・ルネッサンスの審査員に関わってから、毎年400点以上の作品にふれてきています。審査の時には名前が伏せられているため、誰がどの作品かはわかりませんが、「きっとあの方だろうな」、「同じ方ではないかも？」など、自然と一人の表現者の作品の移り変わりを気にしてしまうことがどうしてもあります。例えば、毎日描く、縫うといった日常的な行為が加わると、使用する画材も少しずつ変わってくることがあり、それも楽しみの一つでもあります。また、技術的な上達が見えてくる一方、例えば肉体的な衰えからこれまでできていたことができなくなるといった、誰にでも訪れる進化と退化があり、私はどちらも尊い痕跡だと思っています。

アート・ルネッサンスは公募展であることから、一回の展示で多くても一人2点以上は展示することができません。もちろん展示構成によって2点の場合でも隣に置かれるとも限りません。初回から応募している人がいるとすれば、20年以上の蓄積があり、何が変わって、何が変わらないのか、そういったことから、その人の個性や大事にしているものが見えてくるでしょう。公募展をはじめ、障がいのある方の作品は、グループで展示する機会が多い印象ですが、一つの作品の鑑賞体験をより開いていく方法として、一人の作家が手掛ける作品を過去から新作まで眺める機会も多くしていけたらと考えつつ、この考え方自体もすごく傲慢だとも思っています。

障がいのある方の作品と一言でいっても、技法から思いまで、一つに括ることはできません。表現すること、表現したことを社会へ展開していくことは、誰かとの共有の時間でもあるため、個別の作品自体を外から評価していくことは必要ないのかもしれませんが、しかし、作品に対して感動したことをどのように伝えていくか、みる側のレスポンスの方法が増えることで、表現する人とみる人との繋がりはさらに広がっていくと信じています。



アートギャラリーミヤウチ 学芸員・今井 みはる

●アートセミナー & おしゃべり会 3

「アートの新たな可能性を拓く～薬工ミュージアムの事例から～」

【実施日】2024年12月19日（木）13:00～15:00

【場所】オンライン（ZOOM）

【内容】薬工ミュージアムの福祉とアート、地域とアートをつなぎ、誰もが多様なものとつながる事例を聞き、参加者からの質問をもとに対話をしました。

【講師】薬工ミュージアム 学芸スタッフ／NPO 蛸蔵 理事 松本 志帆子 氏

【参加人数】支援者7名

参加者からの声 アンケートより

- ・アーティスト応援ボックスは作家と観覧者とが繋がるきっかけ作りになる良いツールだと感じた。
- ・企画を主催する上でコンセプトを作り、それに沿ってやること / やらないことを決めておくことは必要なことだと感じました。その他細かな情報もお教え頂き、大変学びになりました。
- ・パザールの取り組みは参考になるなあと思います。作品を展示して販売するまでとなると、かなりハードルが上がるなあと思いました。アーティスト同士の交流や、学びについての狙いがはっきりしていて、何よりいろんな人が見に行きやすいと思いました。

アートの新たな可能性を拓く ～薬工（わらこ）ミュージアムの事例から～

薬工ミュージアムは2011年に開館した小さな美術館だ。専門的な美術教育を受けていない方たちが心のおもむくまま衝動的につくるオリジナリティ溢れた作品やその作り手を紹介する美術館として開設された。作り手の中には障がいのある方もいるため、彼らの表現を紹介したり、文化芸術活動をサポートしたりする事業も行っている。

文化芸術、アートは、心を豊かにし、生きる活力となるものだ。皆がフラットになり、多様な視座や考え方を受け入れる寛容性を持つ。既存の枠を超え、新たな価値観を生み出す。障がいの有無や年齢、社会的立場などに関係なく、誰しもにとって必要なものだ。だが、それは見過ごされがちで、日常に溢れていても遠い存在のように思われている。

文化施設も日常から遠い存在だ。しかし、文化施設は公共、つまり、みんなのもの。町内会、高知市、高知県、四国、日本、いろいろな「地域」の人たちのものだ。建物だけ存在しても意味がない。誰しもが安心して集うことができる開かれた場であることが大切だ。

常に開いていくことを心がけてきた。

例えば美術の分野では、「アートだ!」と思う作品であれば誰でも出品して販売することができる「薬工アンパン アートパザール」を2021年から行っている。障がいの有無などに関係なくアーティスト同士が相互に刺激を受け、学び合い、出品者も来場者も交流できる場づくりだ。だが、これは当館だけで行っているわけではない。どの事業もそうだ。

障がいのある方を含む様々な個性を持つ方や多様な立場の人々が、協働して演劇作品をつくり上演する「いろいろいろを楽しむ演劇プロジェクト」では、多くの団体個人と協働している。様々な人との協働は、互いを対等に認め違いを楽しみながら尊重しあう場を生み出す。小さな共生社会だ。

地域には魅力的な人やモノ、場がたくさんある。それらとつながって関係性を築き、場を共有すること。その場を開いていくこと。それが新しい可能性につながると思う。

これからも常に開いていきたい。

薬工ミュージアム 学芸スタッフ 松本 志帆子



「ケアする現場のものづくり～企画展くきょうの雑貨＞開催から見たこと～」の様子

〔成果〕

新規参加者が多く見られ、関心の広がりを感じることができました。実施後のアンケートにおいても、参加者からは「満足」との回答が多数を占め、内容に対する高い評価が寄せられました。

また、アートセミナーとおしゃべり会を通じて、支援者や関係者が、障がいのある方の表現活動に関する理解を深めるとともに、参加者同士の対話を通じて、現場での課題や取り組みへのヒントを共有する有意義な機会となりました。おしゃべり会で生まれたつながりをきっかけに、施設見学や展覧会への参加など、より具体的な繋がりへと発展するケースも見られ、ネットワーク構築の観点からも一定の成果をあげることができました。

〔課題〕

一方で、セミナーごとの参加者数が十分とはいえず、より多くの方に参加していただくための広報や魅力づけが今後の課題となっています。また、参加者の表現活動に対する知識や関心の程度にはばらつきがあり、どのような層を対象に研修を企画するべきか、企画段階での検討がより複雑になってきています。

今後は、アンケートやおしゃべり会でいただいた参加者の声やニーズをもとに、内容やテーマの選定を工夫し、より多くの方にとって学びの多いセミナーとなるよう、内容を検討していきたいと思います。



(4) 創作活動支援事業の実施

ア 学びと体験ワークショップ

支援者の表現活動に関する知識の向上や、福祉施設・事業所・関係団体における文化芸術活動の活性化、そして障がいのある方が安心して表現活動を行える場の拡充を目的として、ワークショップを実施しました。このワークショップでは、表現することの楽しさを体験し、多様な表現のあり方を知ること、そして、それらを楽しむ視点を育むことを目指しました。

●学びと体験ワークショップ1 絵の具についての勉強会

【実施日】2024年8月31日(土) 10:00～12:00

【場所】広島市安芸区民文化センター 工作実習室 (広島市安芸区)

【内容】絵の具の種類や使い方、特徴などの基本を学びました。

【講師】木利画材スタッフ 片山 修 氏

【参加人数】支援者 13 人

参加者からの声 アンケートより

- ・ワークショップや質問コーナーがあることで、より深く学ぶことができました。
- ・リラックスして参加できて良かったです。
- ・絵の具の知識だけでなく、実際に体験ができて良かったです。楽しい勉強会でした。



「創作アートスペース」の様子

●学びと体験ワークショップ2 創作アートスペース

【実施日】2024年8月31日(土) 13:00～15:00

【場所】広島市安芸区民文化センター 工作実習室 (広島市安芸区)

【内容】参加者自身が考え、さまざまな画材を使って創作を楽しみました。

【講師】元特別支援学校教諭 細川 泉

【参加人数】障がいのある方 3 人 支援者 11 人 合計 14 人

参加者からの声 アンケートより

- ・支援・指導する際の、また描く際の「とっかかり」を障害のある方の特性に合わせて説明くださり、とても参考になりました。
- ・沢山ある材料のなか、選ぶところから楽しい体験ができました。色々と工夫されていてヒントをいただきました。

得意なことからはじめよう！

アートの活動をしていく中で、創造の楽しさは何かと振り返ってみると、ものを作る作業に「没頭」する時間の充実感ではないかと思います。残念なことに、アートの活動に苦手意識を持つ人も多く、その人たちにも創造の楽しみを味わってもらうにはどうしたらいいかをテーマにワークショップを行いました。

私は、制作者が苦手そうなことは隅に追いやって、得意そうなことを中心に活動してはどうかと提案してみました。

大抵、「美術が苦手」「絵が下手だ」という人は、「形」を再現することにこだわりすぎて、躓くことが多いように感じられます。それならば、例えば、「形」には触れずに、「色」や「空間」「触感」など、制作者が得意そうなことを楽しむ方法をテーマにしてみてもいいかということです。

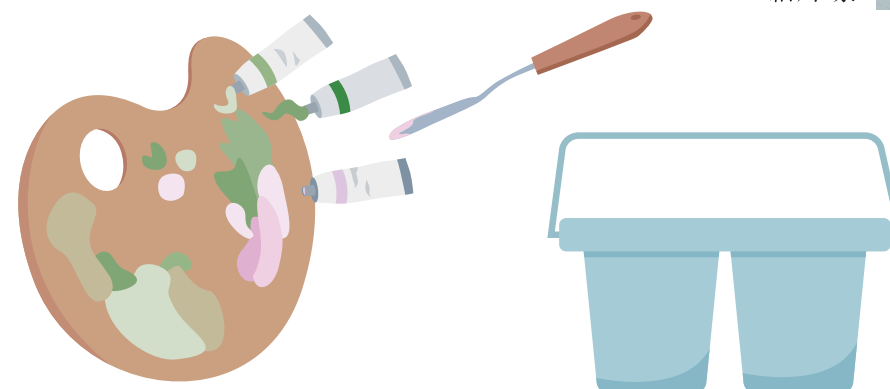
道具や素材については、不要になった絵の具や画用紙等を収集する活動を「サポートセンター」がされているので、ふんだんに用意されていました。

参加者は普段施設等でアートの活動をサポートされている方が多いようでしたが、この日は、自分自身の制作に「没頭」されていたように思いました。

「形」にしがみつ়くことから解放されると、輪郭のない世界が広がり、肩の力が抜けて自由になれると思います。



細川 泉



●学びと体験ワークショップ3 さをり織り体験ワークショップ

【実施日】2024年9月5日（木）13:00～15:00

【場所】社会福祉法人静和会 ぽぽろ明郷（府中市）

【内容】さをり織りの基本知識を深め、効率的な作業工程を学びました。

【講師】手織適塾 SAORI 広島 塾長、SAORI-hands 広島 管理者 たけちようこ 氏

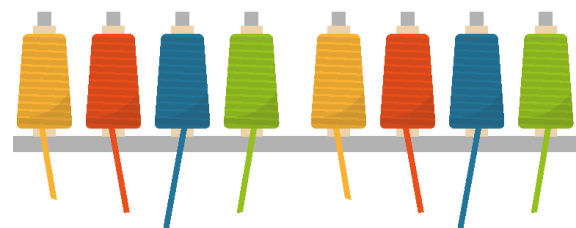
【参加人数】支援者 19 人

参加者からの声 アンケートより

- ・さをり織りはとても奥の深い、幅広いものだと思います。初級、中級ではないけれど、知識別でワークショップがあってもいいかなと思いました。
- ・すぐに実践したい気持ちになった。
- ・織りの技術だけでなく、精神を伝えていただけたのが楽しくうれしかった。
- ・さをり織りのルールが思ったより自由だと感じ、帰って利用者と一緒にするときの気が楽になりました。



「さをり織り体験ワークショップ」の様子



安心して自分を表現できる場所作り

「さをり織り」は、今から50年以上前に、大正生まれのひとりの主婦の趣味から始まりました。織った帯のタテ糸が一本抜けていた。それを知らないうちに面白い模様ができたのとらえ、沢山キズを作るともっと面白いのではないかと考えたことがきっかけとなり、さをり織りが誕生しました。売っているようなものを作るのではつまらない。私たちは機械ではなく人間なのだから、布を織ろうとするのではなく自分を織りましょう、というのがさをり織りです。

ところが常識の中で育ってきた私たちは、自分の中の「布」の概念に邪魔されるのです。そんなつもりはなくてもこれまで見てきた綺麗に整った物たちに無意識のうちに近づこうとしてしまい、自分の中の既成概念を破ることに苦勞します。「障害者」と呼ばれる人たちの中には、その既成概念に邪魔されることなく私たちの感性では遠く及ばないような面白いものを創り出せる方がたくさんおられます。その感性は羨ましいくらい。

その方たちの環境作りとして私たちが何よりも大切にしていることは、スタッフそれぞれの「常識」で判断しないこととマイナスの表現を使わないこと。「端が揃っていて綺麗に織れたね」などという評価をしないのはもちろんですが、「その色は合わないんじゃないか」「太さの違う糸で織るとおかしいんじゃないか」「その糸は素材が違うのに」などの言葉（視線や表情も）は織り手の表現の幅を狭めてしまいます。

自分で好きな糸を選べたことや楽しく織りに取り組むことができたこと、意外な糸の通し方や色の組み合わせによる効果などに注目し、一緒に完成を喜びます。安心してのびのびと好きなように織ることは彼らの自己決定力につながり、「自分」を表現した作品を受け入れられる経験の積み重ねは自己肯定感も向上させます。

なぜなら、「できた作品は彼ら自身」であるからです。



手織適塾 SAORI 広島 / SAORI-hands 広島 たけちようこ

【成果】

初めて参加される方が多く見られ、支援者を中心に表現活動への関心の広がりが感じられました。会場として福祉事業所を使用したことで、各施設が抱える課題や関心に即した内容を取り入れることができ、現場での文化芸術活動の活性化につながる様子が見られました。

また、画材寄付プログラムで提供いただいた画材を使用し、使用後に残ったものを参加者に持ち帰っていただく取り組みも、参加者から非常に好評を得ました。特に、福祉施設や学校現場では画材の購入予算に限りがあるため、このような機会は今後も継続・拡充していく必要性を強く感じました。福祉現場においては、ケアに関する情報の引き継ぎは日常的に行われているものの、表現活動に関する取り組みや技術が十分に引き継がれていないという現状が明らかとなりました。今回のワークショップを通じて、表現活動に対する理解や知識の継承の必要性が再認識される機会にもなりました。

【課題】

相談の中で、創作の場を求める声が増えていることを受け、障がいのある方の参加を見込んで創作アトスペースを企画しましたが、実際には支援者が中心となり、当事者の参加は少数にとどまりました。これは、障がいのある方に創作アトスペース情報が十分に届いていないことや、参加を希望しても同行・支援できるサポーターがいないなどの現状が要因として考えられます。今後は、告知方法の見直しや情報発信の工夫に加え、参加を支える体制の整備も重要となると感じています。障がいのある方に向けた表現活動の場づくりと同時に、支援者の技術向上を目的としたワークショップも、現場のニーズに即しており、引き続き有効であると感じられました。一定の場所で継続的に活動を実施することで、障がいのある方の参加が促されやすくなると思うので、今後は「継続性」や「地域性」に配慮して企画していきたいです。

イ．障害福祉サービス事業所等への専門家派遣

障がいのある方や支援者が、表現することの楽しさを体験し、多様な表現の可能性に触れるとともに、それを楽しむ視点を持ち、学ぶことを目的として、専門家によるワークショップやサポートを実施しました。あわせて、支援者の表現活動に関する理解とサポート力の向上も目指しました。

●専門家派遣１ 遠隔ロボットを使った鑑賞サポート

【実施日】2024年10月5日（土）～2024年10月6日（日）

【場 所】合人社ウェンディひと・まちプラザ

【内 容】アート・ルネッサンス会場にて、遠隔ロボットを使った鑑賞サポートとアーティストによる作品解説の機会をつくりました。

【サポート講師】広島支援機器研究会 魚坂 隆 氏

【参加人数】当事者 7人 支援者 11人 合計 18人



「遠隔ロボットを使った鑑賞サポート」の様子

●専門家派遣２ 「演劇体験ワークショップ」

【実施日】2025年3月1日（土）15:00～17:00

【場 所】社会福祉法人ひとは福祉会（安芸高田市）

【内 容】法人スタッフ対象に演劇の手法で交流し、演劇を体験しました。

【講 師】一般社団法人 舞台制作室 無色透明 坂田 光平 氏

【参加人数】支援者 19人

参加者からの声 アンケートより

- ・お芝居としてなりきってやってみることで、互いに生まれるコミュニケーションってあるなということを感じました。
- ・新たな一面を見せたスタッフもいて、とても楽しかった。



「演劇体験ワークショップ」の様子

●専門家派遣３ 体験ワークショップ「色を楽しもう！」

【実施日】2025年3月15日（土）13:00～17:00

【場 所】キュアシス富士見町（中区）

【内 容】「日本の色」をテーマに色紙で作品づくりを行いました。

【講 師】元特別支援学校教諭 細川 泉 氏

【参加人数】当事者 7人 スタッフ 4人 合計 11人

参加者からの声 アンケートより

- ・創作活動に対して抵抗があった方も、とても楽しんで参加をしている姿を見て、スタッフとして嬉しかったです。



体験ワークショップ「色を楽しもう！」

[成果]

参加者にとって、新たな表現方法に触れる貴重な機会となり、創作活動を通じて自己表現の幅が広がるとともに、他者との交流も深まりました。

特に、遠隔ロボットを活用した鑑賞体験では、移動が困難な方や遠方にお住まいの方でもアート作品に触れることができたほか、来場者と対話しながら自身の作品を紹介することができるなど、より多様な展覧会参加の可能性が広がる実践となりました。

また、支援者向けのワークショップでは、表現活動を取り入れる際の工夫や関わり方のヒントを得ることができ、次年度以降の活動のヒントにもつながる学びが多く得られました。

[課題]

創作活動に関する相談を受け、専門家の派遣を行っていますが、外部講師を福祉施設に招く場合、管理者への確認や現場調整など、多くの配慮が必要となるため、実施にあたって心理的・実務的なハードルを感じる事業所も少なくありません。

また、創作活動においては、ただ技術を教えるだけでなく、参加者と心を通わせながら「共に創る」姿勢が重要です。こうした活動の意義を事業所や支援者に深く理解してもらうには、時間をかけた関係構築が必要であり、活動の充実には継続的な取り組みが求められます。

今後は、施設側の負担を軽減しつつ、柔軟かつ丁寧なサポートを提供できるよう、支援体制の整備や導入方法の工夫を検討していきたいです。



「手話と文字を使った、みんなで楽しむおしゃべり鑑賞会」の様子

2. アウトリーチ型 みんなで楽しむ 「おしゃべり鑑賞会 IN 就労センターあっぷ」

【実施日】2025年1月30日（木）10:30～12:00

【場所】小原中央集会所 絆

【内容】知的障がいのある方を対象にした出張型の対話型鑑賞会。就労センターあっぷに通所し、鑑賞会参加を希望される仲間を対象に実施しました。

【ファシリテーター】広島県立美術館学芸員 岡地 智子

【参加人数】当事者 9人 スタッフ2人 計 11人

参加者からの声 アンケートより

- ・みんないろいろなかんがえかたやみかたがあるんだなと思った。 がくげいいんさんのしかいが分かりやすかった。
- ・いろんな作品を見ていろいろ考えたいろいろなものに見えた。また、美術館の人いろんな大学の先生にきてほしい。

[成果]

参加者はアート作品を介した対話を楽しみ、鑑賞を通じたコミュニケーションの可能性を体感する機会を得ることができました。また、主催者側にとっても、鑑賞に必要な支援ツールや配慮事項について新たな知識を得る場となりました。

アンケート結果からは、参加者の多くが「継続的な開催を希望する」と回答しており、障がいのある方にとってアート鑑賞の場が貴重な体験となっていることがわかりました。

[課題]

初めて参加する人にとって鑑賞会はイメージしづらく、参加に至るまでの心理的なハードルがあることがわかりました。広報番組や動画などを活用し、事前に鑑賞会の雰囲気や流れを伝える工夫を行いましたが、今後もこうした配慮を継続し、さらに効果的な広報方法を検討していきたいと思います。また、実施にあたっては準備や調整に多くの時間を要し、関係団体との連携や広報のための時間が十分に確保できなかった点も課題として残りました。特に、鑑賞会を初めて実施する団体にとっては、開催に向けた段取りや支援体制づくりに不安を感じることがあるため、今後はより丁寧なサポートや実施マニュアル作りなどをしていきたいと思います。

（5）その他障害者文化活動の進行に資する事業

ア．文化芸術等への鑑賞に関する事業

アートと共生に関する調査および施策一体型プロジェクト（広島県、広島大学、広島県立美術館、広島県アートサポートセンター）

●おしゃべり鑑賞会の実施

今年度は、聴覚に障がいのある方と、知的障がいのある方を対象に2回の対話型鑑賞会を実施しました。

1. 手話と文字を使った、みんなで楽しむおしゃべり鑑賞会 ～美術館でアートを見よう～

【実施日】2024年10月5日（土）10:30～12:00

【場所】広島県立美術館 2階展示室

【内容】対話や作品を観ることが好きで、手話通訳や文字情報が必要な方を対象にした対話型鑑賞会を行いました。

【ファシリテーター】広島県立美術館学芸員 岡地 智子 氏

【参加人数】5人

参加者からの声 アンケートより

- ・作者の名前の紹介の部分で、指文字表示だと外国人かな？と思ったけど文字情報を見たら漢字だったのかー！日本人なのかー！と気づくことができました。発言も程よくまとめられていて、振り返りでみる時とてもわかりやすかった。普段の美術館イベントに、手話通訳があったら一番嬉しいけど健常者たちだけでも文字情報のまとめはあっても良いのではないかな？と思いました。



「アウトリーチ型 みんなで楽しむおしゃべり鑑賞会 IN 就労センターあっぷ」

3. シンポジウム

「福祉 / アート / 教育のコラボレーション複数組織の豊かな連携に向けて」

【実施日】2025年2月7日（金）14:00～16:30

【場所】オンライン（ZOOM）

【内容】広島県立美術館、広島県（障害者支援課、文化芸術課）、広島大学、広島県アートサポートセンターが連携して実施してきたプロジェクトの成果と課題を発表し、今後の展望について考えた。

【発表者】認定NPO法人ひゅーるぼん理事長 川口 隆司

広島大学人間社会科学研究科教職開発専攻 准教授 池田 吏志

広島県アートサポートセンター ディレクター 保田 香織

広島県立美術館 学芸員 岡地 智子

広島県健康福祉局 障害者支援課 田村 健二

【参加人数】支援者29人



参加者からの声 アンケートより

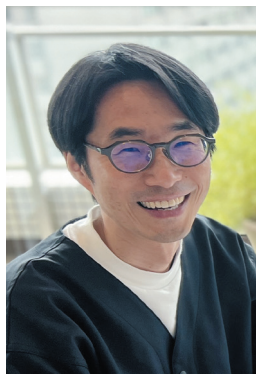
- ・それぞれの方々が熱意を持って取り組んでおられることが伝わり、福祉に携わっている私たち職員も嬉しく感じました。ただ、現実的に、事業所で本格的にアートに取り組むことは、他の作業や利用者様の特性を考慮したときに、難しい面もたくさんあると感じました。今後も、現場の声に耳を傾けていただき、よりよいものになってほしいと思いました。
- ・文化芸術活動を啓発するうえで、体験も含まれる鑑賞というのは、とても有効だと思いました。

複数組織による連携型アートプロジェクトの成果と課題について

今回我々が取り組んだ「アートと共生に関する調査および施策一体型プロジェクト」（以後、本プロジェクト）は、広島県、広島大学、広島県立美術館、広島県アートサポートセンターが連携し、障害者の美術活動（表現及び鑑賞活動）の実態を明らかにすること、そして支援策を講じることを目的として実施されました。発端は、広島県アートサポートセンターからの「障害者の美術活動に関する調査を広島でも実施できないか」という提案であり、これを受けて、広島県内の障害者や支援者を対象に実態調査が行われました。その結果、特に鑑賞活動では、回答者（N=370）の58%が美術館にほとんど行っていないと回答されました。しかし、そのうち70%の人が「機会があれば行ってみたい」と回答されており、潜在的なニーズが存在すること、そして従来の展示形式や鑑賞環境が一部の人にとっては適していない可能性があることが示唆されました。

この調査結果を踏まえ、2021年から2025年にかけて、美術館の展示作品を使った動画づくり、オンライン対話型鑑賞会、遠隔操作ロボットを活用した美術館鑑賞、ろう者を対象とした対話型鑑賞会、福祉施設での美術館アウトリーチ活動など、主に鑑賞活動を支援する施策を企画・実施しました。特に、対話型鑑賞会では、参加者が主体的に作品の解釈を生み出す機会が提供され、美術鑑賞が単なる受動的な行為ではなく、対話を通じて深まる経験であることが示されました。また、遠隔操作ロボットを用いた鑑賞では、移動が困難な方たちが、自宅や施設から美術館の作品を鑑賞する体験となりました。

本プロジェクトは、厚生労働省の障害者芸術文化活動普及支援事業で紹介され、国内外の学術誌にも論文が掲載されるなど、社会的・学術的にも一定の評価を得ることができました。一方で、今後は参加者が「お客さん」の立場に留まらず、美術活動の主体となる機会をさらに拡充すること、そして、自治体、大学、美術館、NPOなど、異なる専門性を持つ組織がリソースを活かして連携し、相互補完的で学際的なアプローチをさらに促進することが求められます。本プロジェクトは、従来の「公平」という概念を超え、社会のあり方そのものを問い直し、すべての人がありのままの姿で美術活動に参画できる「公正・正義」の実現を目指す取り組みである。今後もその実践と発信を続けていきたいと思っています。



広島大学 池田 吏志

一体型プロジェクトに取り組んでみて

本プロジェクトで広島県立美術館が担った主な役割は、美術館ならではの美術作品を中心とした展示室環境の提供やスタッフ対応でした。

本プロジェクトの鑑賞プログラムの一部は、当館がこれまで実施していた「対話型鑑賞会」と「エア美術館（動画制作）」をベースに、これらを発展させる形で考案されました。例えば、ろう者を対象とした対話型鑑賞会では、特別支援学校の先生への事前の聞き取りをもとに手話通訳者を手配、また、参加者の発言が視認できるようにホワイトボードと書記を配置するなど、参加者の障害の特性に合わせてアレンジしました。

これまで、当館単体でも、さまざまな教育普及事業を行ってきたつもりですが、本プロジェクトで実施したような障害者を対象にした鑑賞プログラムを、当館単体で継続的に実施することは、予算的にも知識・経験的にも難しいです。その課題が各団体の連携と役割分担により解消され、また、各専門家が意見を出し合うことで質も向上できたと思います。参加者からも「楽しかった」「また参加してみたい」などのポジティブな意見を多く聞くことができました。今後も一体型プロジェクトのみなさまと協力しながら、活動を続けていきたいと考えています。



広島県立美術館 岡地 智子

アートと共生に関する調査および 施策一体型プロジェクトの成果と今後の展望について

このプロジェクトは「障害のある人、サポートする人の表現および美術展覧会の鑑賞に関する実態調査」（以下「実態調査」という。）の結果を踏まえ、広島県、広島大学、広島県立美術館、広島県アートサポートセンターが連携し、主に障害のある方の鑑賞支援に関する施策を企画・実施しています。

平成30年6月に成立した「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」は、文化芸術基本法及び障害者基本法の基本理念にのっとり、障害者による文化芸術活動の推進に関する施策を総合かつ計画的に推進し、文化芸術活動を通じた障害者の個性と能力の発揮及び社会参加の促進を図ることを目的としていますが、このプロジェクトをきっかけに、県の文化芸術施策と障害者施策を所管している部署が相互に連携して取り組む必要があることを、改めて共通認識をすることができました。

連携協力することにより、これまで実施できていなかった鑑賞支援の取組の推進につながるとともに、行政の視点だけではなく、参加する関係者の専門知識やノウハウを活用することで、新たな取組や成果を生み出すことができると実感しており、今後、このプロジェクトでの取組が、他の文化芸術施設等でも実践できるよう、広く情報発信していくことも必要であると感じています。

また、実態調査では「展覧会にほとんど行っていない」と回答した割合が58%となっていることから、県内の文化芸術施設等での鑑賞支援の取組や、学校の教育活動等で美術館を見学する機会が設けられているかなどの実態把握も必要ではないかと考えています。

引き続き、障害のある方が身近な地域で文化芸術活動を行うことができる環境づくりを進めるとともに、誰もが自らの意思で文化芸術活動に参加する機会や場を選択でき、個性や能力を発揮し、生きがいを持って暮らせる社会の実現に向けて、一体型プロジェクトのメンバーをはじめ、関係団体・機関や、福祉施設と文化芸術施設等との連携を図りながら、施策の推進に取り組んでまいります。

広島県健康福祉局障害者支援課 主査 田村 健二
(現：海田町福祉保健部社会福祉課 課長)



【成果】

これまでの取り組みの成果を共有し、多様な分野からの参加者と共に今後の展望を考える機会となりました。オンライン開催としたことで、県外からの参加者も多く、このような取り組みに興味を持っている方が増えていることを実感することができました。

【課題】

発表中心の構成となり、参加者の声を十分に拾うことが難しいという課題がありました。事前に参加者の質問や関心を把握し、それを当日のプログラムに反映させるなど、より双方向的なやりとりができるよう配慮していきたいと思いました。
今後も、多様な立場からの視点が加わることで、障がいのある方の文化芸術活動の可能性がより広がることの事例を作っていきたいです。

●その他このプロジェクトでは、広島県立美術館紹介動画制作に向けた検討も行いました。



Ⅱ 「アートの巣箱」公募事業

●助成事業「アートの巣箱」

地域で障がいのある方の芸術文化活動を応援する人が増えることを目指し、地域で表現活動に取り組んでいる4団体を助成し、活動のサポートを行いました。

1. 和えるダンス

【助成金交付先】ART COMPLEX HIROSHIMA

【実施日】2025年1月11日（土）～1月13日（月祝）

【場所】JMS アステールプラザ 1F ギャラリー

【内容】インクルーシブダンスワークショップと発表会 絵本『てぶくろ』作：ウクライナ民話を読み解きながら、創作・身体表現につなげていく。

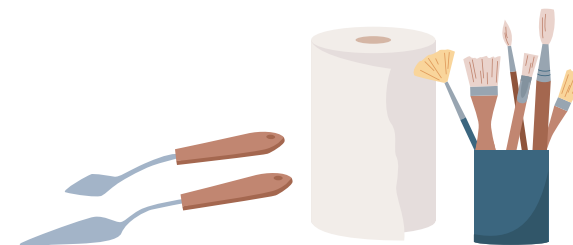
【ファシリテーター】玖島 雅子 氏

【参加人数】本人5名、支援者・サポーター10名、一般11名 計26名
観客 延べ25名 総合計 51名

主催：ART COMPLEX HIROSHIMA

協力：KAZOO

助成：令和6年度広島県障害者文化芸術活動支援事業



「和えるダンス」の様子



2. We are ユニカーズ！

【助成金交付先】天辺塔

【実施日】2024年 9月16日（月・祝）10:00～12:00

2024年 9月23日（月・祝）10:00～12:00

2024年10月 6日（日）15:00～17:00

2024年10月14日（月・祝）10:00～12:00

2024年11月 3日（日・祝）10:00～12:00

2024年11月 4日（月・祝）10:00～12:00

2024年11月24日（日）13:00～17:00

2024年12月 1日（日）13:00～17:00

2024年12月 8日（日）13:30～15:00



「We are ユニカーズ！」の様子

「和えるダンス」の様子



- 【場 所】東広島芸術文化ホールくらら、東広島総合福祉センター、黒瀬生涯学習センター、東広島運動公園、道の駅湖畔の里福富多目的ホール
- 【内 容】クリエーションワークショップと試演会。
谷川俊太郎さんの詩を中心として、ワークショップで試した色々なことを盛り込んで約15分の作品に仕上げた。
- 【ファシリテーター】中村 房絵 氏
- 【参加人数】当事者8名、支援者・サポーター1名、一般 3名 計 12名
観客 延べ28名 総合計 51名

3. 音楽でつなぐ みんなのハーモニー

【助成金交付先】ワークショップ西風舎

【実施日】2024年 9月30日（月）13:00～15:00

2024年11月25日（月）13:00～15:00

2025年 2月 5日（水）14:00～14:45

【場 所】ワークショップ西風舎 広島市立己斐小学校

【内 容】音楽を通じて、多様な背景を持つ人々との交流会と発表会

【発表者】ピアニスト 三浦 裕美 氏／広島市立己斐小学校4年生

ワークショップ 西風舎の通所者と地域の方たち

【参加人数】本人15名、支援者・サポーター3名、一般30名 計 48名

小学生 97名 総合計 145名



「音楽でつなぐみんなのハーモニー」の様子

4. 自分だけの器をつくろう！

【助成金交付先】

特定非営利活動法人つくしんぼ作業所

【実施日】

2025年1月31日(金) 10:30～12:00

2025年2月6日(木) 10:30～12:00

2025年3月18日(火)～3月31日(月)

【場 所】

桜西町町内会集会所 つくしんぼ作業所

【内 容】

陶芸の体験ワークショップと展示会

【講 師】

陶芸教室 童夢 大佐古 雅文 氏

【参加人数】

本人 17 名、

支援者・サポーター 9 名 一般 6 名

計 32 名



「自分だけの器をつくろう！」の作品展



「自分だけの器をつくろう！」の様子

「アート」の巣箱の成果

地域で障がいのある方の文化芸術活動に関心を持つ人が着実に増え、活動を支えるコミュニティの広がりが見られました。採択された4つの団体が、それぞれの特色を活かしたワークショップや発表会を実施し、障がいのある方と地域住民や支援者、専門家がともに創作・鑑賞に関わる場をつくりました。こうした取り組みは、参加者の表現力や自己肯定感を育むと同時に、地域社会における相互理解や多様性への意識向上にもつながりました。特に、障がいの有無を超えて共同作業を行う場面では、連帯感が生まれ、活動を通じた関係性の構築を実感しました。また、繰り返し活動を行う団体においては、表現活動の質や参加者の関係が深まり、発表の場が大きな達成感をもたらす場となりました。

「アート」の巣箱の課題

助成事業に対する関心は高いものの、実際に実施へ踏み出す際には不安や困難を感じる声も少なくありませんでした。特に、初めて事業に取り組む団体にとっては、企画立案や運営に関する知識・経験の不足が大きなハードルとなっており、応募自体をためらうケースも見られました。このため、今後は初参加の団体に対して、より丁寧な情報提供や事前相談、伴走型の支援体制を整備することが重要と考えられます。また、これまでの助成先の事例紹介を通じて、より多くの団体が一歩を踏み出せるような環境づくりも検討したいです。さらに、既に継続して活動に取り組んでいる団体に対しては、活動の定着や発展を促すためのサポートが必要と感じています。次年度に向けて、こうした継続・発展型支援と新規団体支援の検討を行いながら「アート」の巣箱の効果的な運営を目指したいと思います。

ウ．画材寄付プロジェクト

不要になった画材の寄付を募り、主催事業の学びと体験ワークショップや専門家派遣先での活用や、必要とされている人や福祉事業所に配布しました。今年度は、県外の方からの問い合わせが多く、ホームページを見て連絡をくださった方が大半でした。

画材提供いただいた件数 36 件

エ．ネットワーク構築

障がいのある方の表現活動をサポートしている人・団体が協力しあうことができる環境を整えること、地域に障がいのある方の表現活動を応援する人が増えることを目的に、展覧会やイベント、集いの場に参加し、交流しました。

1. のらのらの会

のらのらの会は、「障がいのある方の表現を大切にしたい」という思いをもった、本人、保護者、福祉施設・事業所の支援者、美術館やギャラリーの学芸員、一般のアーティスト、大学関係者、企業など、様々な立場の方が集まり、共に、互いの思いを擦り合わせるができる場や活動を行う会です。それぞれの強みを活かした仲間とのつながりを築き、今年度は下記に記載した事業以外に、各自が所属する場所で創作活動の場の安定や展覧会の開催などが行われました。

① のらのらの会 県内視察

【実施日】2024年5月15日(水) 10:00～14:00

【場 所】一般社団法人 HAP、cafebar&gallery かのえ

【内 容】一般社団法人 HAP が運営している福祉事業所の視察と座談会

【参加者数】9 人

主 催：のらのらの会

協 力：太田川学園、大日学園、ひとは福祉会、友和の里、一般アーティスト、ウッドワン美術館、広島県アートサポートセンター

② のらのらの会 ～のらりくらの旅 鳥取編～

【実施日】2024年7月17日（水）～18日（木）

【場所】もみの木福祉会、あいサポート・アートセンター、砂の美術館、鳥取県庁
アートスペースからふる、鹿野第二かちみ園、鳥の劇場

【内容】今後の活動のヒントを得ることを目的に、鳥取県で障がいのある方の表現活動をサポートされている施設・事業所、団体を視察しました。

【参加者数】8人

主催：のらのらの会

協力：広島県アートサポートセンター、ひとは福祉会、大日学園、友和の里
株式会社ウッドワン、アーティスト保護者



のらのらの会のらりくらの旅 鳥取編



③ のらのらの会 広島県知的障害者福祉協会文化・芸術活動の部圏域委員会 事例共有会

【実施日】2025年3月3日（月）10:30～16:00

【場所】鞆の浦・燧冶、社会福祉法人あづみの森

【内容】尾道あづみ麦酒醸造所の見学と音（楽）的・ダンス的など、利用者さんの「動き」「くせ」「行為」などの事例共有会

【参加者数】8人

主催：広島県知的障害者福祉協会 文化・芸術活動の部 圏域委員会



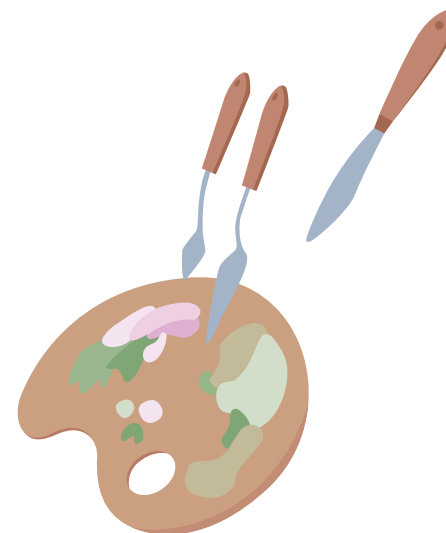
2. 中国・四国ブロック広域センター パズル主催事業

定期的で開催される「ふらっとflat」「会議」「研修会」や中国・四国ブロックのセンターが協力して行う「デリバリープロジェクト」に参加しました。



3. ひろしま文化財団

ひろしま文化財団が主催する映画会や講座へ参加し、文化施設関係者や講師の方と情報交換する機会を積極的に持ちました。



(6) その他協力依頼対応

●ピースアートプログラム アート・ルネッサンス 2024

開催に向けての準備、展示作業、期間中の受付、撤収作業などを行いました。

【実施日】2024年9月28日(土)～10月6日(日)

【場所】合人社ウェンディひと・まちプラザ北棟4階ギャラリー

主催：広島市、認定NPO法人ひゅーるぼん、アートサポーター

●令和6年度 あいサポートアート展

開催に向けての準備、展示作業、期間中の受付、撤収作業などを行いました。

【実施日】広島会場：2024年10月29日(火曜日)から11月3日(日曜日)

福山会場：2024年11月26日(火曜日)から12月1日(日曜日)

【場所】広島会場：広島県立美術館

福山会場：ふくやま美術館

主催：広島県

※福山会場における開催については、福山市との共催

●おきらく劇場ピロシマ 演劇クラブ

福祉的サポートと、アドバイスをしました。

【実施日】2024年6月16日(日) 13:00～16:00

2024年7月21日(日) 13:00～16:00

2024年10月20日(日) 13:00～16:00

2024年11月10日(日) 13:00～16:00

2024年12月15日(日) 13:00～16:00

2025年1月12日(日) 13:00～16:00

【場所】広島市中央公民館、三篠公民館

【内容】演劇の手法を使った表現ゲームや、チームでの演劇作品創作の体験

【参加者数】8人

主催：一般社団法人舞台芸術制作室無色透明

協力：認定NPO法人ひゅーるぼん、アートサポートセンターひゅるる

後援：広島県

●けったいなものがみたい

～大阪の町屋のおばちゃんたちが始めた小さな事業所のお話～

講演会の企画・実施についてのサポートとアドバイスをしました。

【実施日】2025年1月18日(土) 13:00～15:00

【場所】JMSアステールプラザ大会議室A

【内容】アトリエコーナスの30年分の歴史を聞き、今後の取り組みについて考える講演会

【講師】特定非営利活動法人コーナス 代表理事 白岩高子

【参加者数】30人

主催：合同会社E&T らいふスペースともある

協力：広島県アートサポートセンター

●日韓交流事業「障害と芸術教育における共創」と交流展覧会「New World」

交流ウェビナー、展覧会への作品出品、現地での交流事業をサポートしました。

【実施日】New World展：2025年1月4日(土)～3月12日(水)

交流ウェビナー：2025年2月13日(水)

現地視察・交流会・展覧会鑑賞：2025年2月17日(月)～2月19日(水)

【場所】漢陽大学博物館、NPO Sprigshine、ソウル市瑞草区ハンウリ・リハビリテーションセンターほか

【内容】交流ウェビナーでの両国の情報交換、現地での障害者アーティスト・保護者・サポーター・研究者による交流、New World展の鑑賞、NPO・公的施設の見学

【参加者数】延べ29人

主催：韓国障害者文化センター、HEADLab（漢陽大学＋デザイン教育センター）、漢陽大学、漢陽大学博物館

協力：社会福祉法人三矢会太田川学園、認定NPO法人コミュニティリーダーひゅーるぼん、広島大学准教授 池田史志、東京学芸大学准教授 笠原広一、一般社団法人アートネットワークス



ソウル市瑞草区ハンウリ・リハビリテーションセンターの所属アーティストとの交流



韓国の障害者アーティスト、保護者、支援スタッフ、研究者との交流イベント（at NPO Springshine）

(7) 相 談

障がいのある方の表現活動にかかわる悩みや相談事が解決されることを目指し、相談対応を行いました。

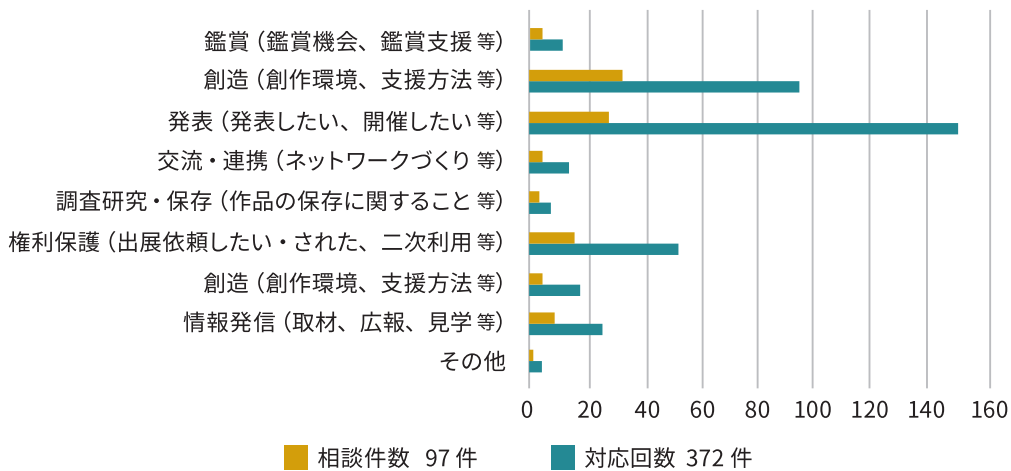
【受付方法】対面・電話・メール・Fax・ホームページ

【内 容】対面・電話・メール・Fax・ホームページでの相談対応。あいサポートアート展の会場にてアート相談窓口を設置し、アドバイザーが相談対応を行う。

●新規相談件数内訳（令和6年4月1日～令和7年3月31日）

相談者	相談件数	主な相談内容
障がいのある方	16	表現活動がしたい 発表したい等
家 族	10	表現活動の場について等
障害者福祉関係 (障害福祉サービス事業者、当事者団体等)	35	表現活動の場について ネットワーク構築について等
文化施設 (美術館、博物館、劇場、ホール、ギャラリー等)	3	鑑賞支援について等
芸術家・文化団体・文化関係者	8	鑑賞支援について ネットワーク構築について等
市民団体 (サークル、クラブ活動等)	6	権利保護について等
教育関係者	5	創作支援について 発表の場について等
医療機関	0	—
自治体	2	情報発信について 作品の二次利用等
企 業	11	作品の二次利用等
その他 (報道関係等)	1	取材について等
合 計	97件	継続対応回数372回

相談分類件数



対応事例①

【相 談 者】障がいのある方

【相談分類】発表（発表したい、開催したい、依頼された）

【相談内容】絵を描いた。公募展に応募したいが入選するか不安なので見て欲しい。

【対 応】審査員や美術の専門家ではないので、評価することはできないことを伝えたが、納得いかない様子であったため、あくまでも感想であることを強く念押ししたのち、コメントした。

【そ の 後】公募展に応募し、作品が入選したと報告を受けた。

対応事例②

【相 談 者】支援者

【相談分類】権利保護について

【相談内容】精神障がいのある方が、著作権があるキャラクターを既製品のブロックで作られている。著作権の事を気にされていて、作品応募できないようだが、その方も作品展に応募する事は可能か教えてほしい。

【対 応】著作権があるキャラクターと自覚があるのであれば、応募は控えた方が良いことを伝えた。個人的に楽しむのは問題ないので、表現することは続けてほしいことを伝えた。

対応事例③

【相 談 者】企業

【相談分類】発表（発表したい、開催したい、依頼された）

【相談内容】3月末に自社の美術館にて、雇用している障がいのあるアーティストと県内の障がいのあるアーティストとの展覧会を実施したい。県内のアーティストの作品出展と開催にあたり、サポートセンターに協力して欲しい。

【対 応】企業の意向を聞き取った上で、他団体、福祉施設・事業所も含めて数回意見交換を行い、実施に向けてサポートした。

【そ の 後】予定通り、展覧会は無事に開催され、サポートセンターも関連イベントにも参加した。相談者からは「多くの方が来場し、非常に好評だった」との報告を受けた。また、サポートセンターのホームページに掲載した。案内を通じて、来場者から作品に対するコメントが寄せられ、その声をアーティスト本人に伝えることができた。

〔成果〕

個人や企業からの相談や継続対応が増加し、表現活動に対する関心が広がっていることを実感する一年となりました。個人からの相談では、福祉施設等に所属しておらず、身近に表現活動を支援する人がいない障がいのある方が多いことがわかり、そのような方々に対しての支援の重要性が改めて認識されました。

企業からの相談では、障がいのある人のアートとの関わり方や二次利用に関するものが多く、なかでも、障がいのある方のアートを活用した事業をされている企業の取り組みが度々話題に上がるなど、同様のアプローチを通じて社会貢献や障害者雇用を考え始める企業が増えている傾向が見られました。また、福祉施設や事業所からは、障がいのある方が持つ独自の表現を社会へどう発信していくかについての相談が寄せられました。企業が求めるアートと福祉の現場が大切にするアートの間には価値観の違いがあることが明らかとなり、そのズレを理解し合う場づくりの必要性も感じることができました。

〔課題〕

情報不足やリサーチの不十分さにより、対応が難航し解決に至らない相談が蓄積されつつあります。個人からの相談が増加する中で、それぞれのニーズに応じた適切な対応を行うには、相応の時間と労力が求められます。また、情報や資源の不足により、即時に対応できない場面もありました。こうした課題を解消していくためには、相談者の多様な状況を的確に把握し、必要な情報を収集・整理・提供していく仕組みの強化が求められます。今後は、より多くの関係者とのネットワークを構築し、支援の選択肢を広げていくことが必要と考えています。持続的かつ柔軟な支援体制の整備を進め、個人・団体・企業それぞれに応じた対応を行っていきよう努めていきたいです。

1/24 に思うこと

2001年1月に「エイブルアートフォーラム」というセミナーを開催しました。社会福祉法人たんぽぽの家の故播磨靖夫さん、絵本作家のはたよしこさん、今はすっかり有名になられたやまなみ工房の山下完和さん、そして野呂山学園の故長恵先生。それぞれの口から語られる障がいのある人たちの表現作品の魅力は私を含め会場の多くの人を虜にしました。「(話だけでなく) 実際に障がいのある人たちのアートを観てみたい」という声に応え、その年9月に開催した公募作品展「アート・ルネッサンス」は今も続いています。さらにその経験とネットワークの蓄積が、この広島県アートサポートセンター事業にも活かされていることを感じます。

しかしながら、ここ数年展覧会の入場者数は減少傾向にあり、またさらに、施設・事業所あげて表現活動に取り組むという熱も下降気味、いや、取り組んでらっしゃるところはほとんどないのは気長にやってらっしゃるけど、そうでないところはぱったり、そして数も激減したという感じでしょうか。上から示される業務の増大とそれに伴って求められる効率化は、表現することさえも奪いつつあるように感じます。彼らの表現の魅力に心動かされともに動く人たちさえも、口々に活動が続けることの難しさを話されることが増えてきました。

2001年に初めて野呂山学園の長先生を訪ねたときのこと。先生はにこにこしながらたくさん作品を持ってらっしゃって、「この作品の〇〇さんはね…」と、延々とその作品ができるまでの経緯や紆余曲折、その時間の中で生まれくる関係性やその高まり、気づき、学びなどたくさん話をしてくださいました。それまでやはり当時多忙極まりない学校の中で障がいのある子どもたちとかかわっていた私は、そのお話に共感するとともに「学校にもこうした時間が必要だったんだ」と深く感じたことを思い出します。

2018年の「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」施行以降、文化芸術活動を取り巻く環境やそれに伴う多様な社会の動きにはめまぐるしいものがあります。もちろんいいこともたくさんありますが、その逆もあります。いかにもと思えるような特異性や特徴を持ったアートがなんとなく「障がい者アート」としてカテゴライズされつつあることや表現の結果としての「障がい者アート」に多くの企業さんたちが着目し、営利活動のひとつとして活用される動きが加速されつつあること等はその顕著な例のように思います。

こうした動きに、現場や家族、本人は本当に無力で、特にそのスピード感にはまったく合わせるできません。誰のために何が推進されているのか…とふと感じます。

現場も社会も加速化する中で、先ほど伝えた「こうした時間」はどこに行ってしまうのか。さらに、表現活動を推進する私たちにとって、「観てみたい」という声に応えたその次の一歩は、この社会の中で、どの方向へどう踏み出すべきか。



そんな中、今回の報告書へ寄稿してくださった先生方の文章には「こうした時間」が包含する力がたくさん書かれていました。そしてそれは私たちが進むべき道も示してくださったように思います。

「安心してのびのびと好きなように織ることは彼らの自己決定力につながり、『自分』を表現した作品を受け入れられる経験の積み重ねは自己肯定感も向上させます。なぜなら、『できた作品は彼ら自身』であるから」

「こだわりやくせといった『弱さ』とされることにも着目し、それを製造過程にとりいれる。…常識的な製品基準であればクリアできないような不揃いな工具の痕跡を類例のないデザインとして肯定することなど…それは、『できない』をそのままのかたちで『できる』へと換骨奪胎させる支援者の粘り強いまなざしの表れ」

「『形』にしがみつくことから解放されると、輪郭のない世界が広がり、肩の力が抜けて自由になれる」

「『場』の存在のたいせつさにも改めて気づいた。…多様な人の多様な思いに触れて新たな展開をしていくことのすばらしさを教えてくれ、一人の審査委員を育ててくれた。」

「表現すること、表現したことを社会へ展開していくことは、一つの動向や活動、誰かとの共有の時間でもある」

「すべての人がありのままの姿で美術活動に参画できる『公正・正義』の実現を目指す取り組み」
「こうした時間」が失われつつある現場。加速化する社会。私たちは法律や基本計画に目を奪われることなく、目の前の彼ら自身、彼らと共にある人たちをしっかりとみつめ、歩んでいくことの大切さをつくづくと感じた24年目の1年間でした。表現を応援する、応援したい人たちは確実に広島の地にいらっしゃいます。その力をつなぐこと、その力に本人たちが出会う機会を作ること、そしてそのプロセスをよりたくさんの人たちに伝えていくこと。25年目の今年、より工夫を凝らしながら「あなたの表現活動を応援する」アートサポートセンターでありたいと思います。

多くみなさまのご支援とご協力に感謝申し上げつつ、みなさまの熱い思いにたくさんの期待を込めて。

広島県アートサポートセンター
(認定NPO法人ひゅーるぽん)
川口隆司

一年を振り返って（総括）



2024年度は、障がいのある方々の表現活動を支援する取り組みを、より深めることができた一年となりました。関係機関や地域の皆様のご協力のもと、多様な活動を通じて新たなつながりや可能性を広げることができました。

障がいのある方の表現活動に対する社会的な関心が高まり、個人、福祉施設、企業等、さまざまな立場からの相談が増加しました。サポートセンターには、これまで以上に幅広い内容の相談が寄せられ、それぞれの目的や背景に応じた対応を行う中で、表現の機会の創出と社会的理解の促進に取り組みました。

特に、福祉施設に所属していない、周囲に活動を支える人がいない障がいのある方からの相談が増加し、表現活動を支える地域的・制度的な仕組みの整備が、引き続き課題であることを再認識しました。

また、企業からの相談においては、障がいのある方の雇用や社会貢献の観点から表現活動に関心を寄せる動きが見られ、障がいのある方々の表現活動が広く認知され、新たな土壌が作られつつあると実感しました。

一方で、企業が求めるアートのあり方と、福祉の現場で重視されるアートとの間には価値観の違いがあることも明らかとなり、今後はこうした違いを理解し合い、尊重し合うための対話の場づくりが必要であると感じています。

画材寄付プロジェクトでは、県内外から多くの寄付がありました。寄付してくださる方のものを大切にする姿勢や思いを感じながら、主催ワークショップや福祉事業所への提供を通じて活用しました。このプロジェクトでは、ホームページを介した問い合わせが多く、継続的な情報発信の重要性を改めて実感することができました。

ネットワーク構築においては、他団体との連携を中心に、視察やイベントを通じて県内外の福祉事業所・アーティストとのつながりを深めました。特に鳥取県での視察は、今後の活動の方向性を考える上で貴重な学びの場となりました。

また、地域の文化活動にも積極的に参画し、障がいのあるアーティストの発表機会の拡大に貢献しました。

一方で、情報不足や調査の限界により、すぐに解決に至らない相談も蓄積しつつあります。特に個人からの相談は多様化しており、それぞれに応じた丁寧かつ柔軟な対応には、さらなる時間的・人的リソースが必要です。今後は、相談対応力の強化に向けた情報収集・提供の仕組みの見直しや、関係機関との連携を深め、ネットワークの拡充を進めていく必要があります。

総じて、2024年度は、これまでの取り組みが着実に成果へとつながった一年であり、障がいのある方々が安心して創作に取り組める環境づくりに向けた大きな一歩となりました。今後も、「誰もが自分らしく表現できる社会」の実現を目指し、一つひとつの声に丁寧に耳を傾けながら、支援体制の強化と活動の継続・発展に努めてまいります。

最後に、本事業の実施にあたり、ご支援ご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

令和6年度 広島県障害者文化芸術活動支援事業報告書
広島県アートサポートセンター

〈編集〉広島県アートサポートセンター
〒731-0102 広島県広島市安佐南区川内6丁目28-15
認定NPO法人ひゅーるぽん内
TEL 070-5671-8668 FAX 082-831-6889
MAIL hululu@hullpong.jp URL <https://hululu.jp>

〈デザイン〉株式会社アームス

〈発行日〉2025年3月

2024 Report on
Supporting Disability
Arts and Cultural
Activities in
Hiroshima Prefecture